

若人よ起て

両親に死に別れ、兄を失い、天涯孤独、その上とかく病気がちである。幾度職を求めても得ない。私は君に同情する。

悲観厭世に陥り、前途を憂い、過去を欺き、涙の人となって暗に人生を呪うのも無理はない。

だが

私は信ずるが故に、君を叱咤する。

「青年よ。涙の谷底より起ち上れよ！」と。

獅子は、子を生むや三日にして谷底に蹴落して、はい上つて来るもののみを養うと言う。

君一人に生きる天地が与えられないはずはない。

生きる道は必ず開く。信じて起て、浜を払って立ち上れ。

私だつて明日より、八百屋となつて街を荷車をひいて歩かねばならないかも知れぬ。

その時私は誰よりも精出す八百屋になつて見せる自信がある。

あたつては碎け、あたつては散る磯の波が、波より堅い巖をうがつてはないか。

君は学校を出た。学校を出さへすれば、すぐその日から月給にありつけて飯の食えたるのは昔のことだ。学校を出たならば労働しないですむと思つたことが間違いである。

どんな仕事でもいい。与えられた仕事に精進すれば、よろこんで生き得る天地は必ずある。

職があるまで力を落さないで求めてゆけ。決して自暴自棄してはならない。

人には一代幾度かの苦難がおとずれる。

その時、じつと忍べ、過古を追憶する時、棄てることの出来ないなつかしい絵巻物は、必ず、その苦心惨憺の時の記憶である。しかもそれは勝ちつづけて、新しい道の開いた時のことである。

あとになつて考えた時、私に一番薬となつたのも辛苦の経験であり、体験を通して自信がつき力がつき、我がものとして語り得る生きた学問の出来たのもその時である。

石州の清さんは盲であつた。一度だつて人に礼を言ったことのない男。屋根は破れ、雨は家の中に降り込むので、村人が、家を造つてやった時も、「お前の恥になるので家を作りおつた。」と言ひ、入口が一つだったので「貴様らは、俺を狸と間違えたか。入口が一つしかないではないか。」と怒鳴つた。盲で悪たれ口をきくことより外知らない清さんを、それでも村人は餓えさせなかつた。

ものを受けたら、礼を言うことを知り、手にかなったことを働く心があり、与えられねば求めてかかり、それでもまだ飢えるのならば、自殺しなくとも、水をのんで、床に横たわって死を待つべし。死より先きに、何ものかにふれ何事かを体験するであらう。

多くの人は諦めずして苦しむ。諦めるとは、「あきらかにみることである。ものを根本まで考えてゆくことである。

「事実にもないことを疑はれて苦しい。」

その怒りを苦しむより、

「自分は決してそんなことをしてはいない。していないのを世間が誤解した。しかし、自分が生きているのは世間から認めてもらうためではない。右手がしたことを左手が知らなくてもいいのだ。自分のことは自分が知っている。仏が知っている。」

言い訳をしないでも、悪まないでも、すこすこ歩ける。

病気になった。先きのことが心配だ。家内がどうにかしてくれ。親族もある。それらが助けてくれる。くれなかつたら・・・餓えて行ってもいい。そこまで諦めると、すっかりおちついた世界に住まれる。

だが君が今泣いているのは、決してそこまで行きづまってではない。暗い顔して終日考えこんだつて解決はつかない。

職が得られなかつたら、読書せよ。三度の食事を二度にして、も、石油箱を机のかわりにしてでも、がつちり読書した幾年かがなくては、立派な人にはなれない。心を大胆にもつて静かに今自分を培ってゆけ。

2

ちよつと考えた時、客観の条件が君を殺すような気がする。だが決してそうではない。ただ一つ足りないものは金剛不壊の大信念である。動かすべからざる腹である。

火の中でも水の中でも、如何なる苦悩の中でも、歩みきって行く意志が生れた時、そこには、必ず広い道が開かれる。

若人よ。くれぐれも君に同情する。だが私は、君の周囲が悲惨であり、淋しく孤独であることに同情するよりも、もつと、君が、温室の花の如く、今日まで弱々しく育つて来た君の過去の幸福に同情する。

若人よ。その逆境を喜べ。枯れる葉は枯らせよ。落ちる花は落せ、しかして今一度、霜雪と戦つて、芽を出し、枝を伸ばし、花を咲かせよ。

汝の真価はただそこからのみ生れ、汝の光は苦闘によつてのみあらわれる。

敢て叱咤す、

青年よ。

涙の谷底より起ち上れ。